

アルケイアー記録・情報・歴史・歴史
第六号 二〇一二年三月 一―二三頁
南山大学史料室

大学資料と自校教育
―大阪樟蔭女子大学の場合―

白川哲郎

The Relationship between
Osaka Shoin Women's University Archives and
Teaching the Students about Their Own University

SHIRAKAWA Tetsurou

archeia: documents, information and history

No.6 March, 2012 pp.1-23

Nanzan University Archives

大学資料と自校教育

—大阪樟蔭女子大学の場合—

白川哲郎

はじめに

はじめまして、白川です。

今、永井さんからご紹介いただきましたように、最近はこちらちょっと怪しいところがありますが、私は、元々、日本中世史、院政期から鎌倉時代の公家の政治史を専門にしております。近現代史については素人で、今日のテーマに関わって申しますと、近代女子教育史については殆んど何の知識も理解も無いまま作業、検討を始めました。

ですので、今日お話しさせていただく内容は、あくまでも私が勤めております大阪樟蔭女子大学という一大学における事例の紹介に留まるのではないかと思っております。どのくらい一般化できるかという点については、甚だ自信がございませんし、正直申しまして、樟蔭―ふだん使っております。樟蔭〃と略させていただきまは、大学資料に関して、むしろ「遅れている」のではないかとの思いもございます。そういうことからしますと、今日は、

ある意味、当たり前のことをお話しさせていただきただけになるかもしれませんが、どうかよろしくお願いいたします。

◇大阪樟蔭女子大学の歴史と現在

では最初に、大阪樟蔭女子大学の沿革、樟蔭の歴史と現在について簡単にお話しさせていただきます。お手元に資料として、『学園要覧』をお配りさせていただきましたが、その中の「学園構成の変遷図」を見ていただきながら、お聞きいただければと思います。

大阪樟蔭女子大学、その母体となる樟蔭学園の創立者は、森平蔵という人物です。森は、元々、材木商で、その後汽船会社を設立するなどして成功を収め、富を蓄えました。その蓄えた私財を女子教育に投じたという人物です。森は、一九一七（大正六）年、高等女学校設立の認可を受け、翌年四月に、樟蔭高等女学校が開校致します。当初、新聞で「贅沢学校」などと揶揄されたりもしております。樟蔭は、深緑色―樟蔭カラーの袴、深緑色の袴と言いますと、たぶん皆さんが思い浮かべられるのは、宝塚歌劇団だと思っておりますが、実は深緑色の袴は、宝塚よりも樟蔭の方が先なんです。その深緑色の袴がシンボルとなった、ちょっと言葉は悪いですが、いわゆる「お嬢様学校」としてスタートしました。

大学の直接の前身である樟蔭女子専門学校は、一九二五（大正一四）年に設置認可を受け、翌年四月に開校しました。開校当初は、国文科、家政科、技芸科の本科三科と一年制の予科からなっており、この樟蔭女専開校から数えて、大学は八十五年目ということになります。一九二〇年代、特に二五（大正一四）年ぐらいから女子の専門学校が急増したことが明らかにされていますが、樟蔭女専は、まさにその時期に誕生した女子専門学校でした。

変遷図を見ていただいたらお判りいただけるように、その後、これはどの女子専門学校でも同様なんだろうが、戦争中に学科の改編がありました。さらに第二次世界大戦後の教育改革によって、樟蔭高等女学校は、樟蔭中学と樟蔭高等学校となり、樟蔭女子専門学校は、一九四九（昭和二四）年に大阪樟蔭女子大学となりました。女子専門学校から昇格した「教養型」の四年制女子大学は、大阪府下では、二〇〇五（平成一七）年に大阪府立大学へ統合された府立の大阪女子大学と、樟蔭の二校だけでした。

その後は、度重なる改組を経て、現在は、大学と大学院、大学の付属幼稚園からなり、学園ということで申しますと、中学、高校を合わせて、女子の総合学園となっております。

◇大学（学園）資料との出会い

次に、樟蔭の大学資料との出会いについて話をさせていただきます。変遷図で言いますと、樟蔭女子短期大学、

私が樟蔭に就職したのは、一九九九（平成一一）年のことです。変遷図で言いますと、樟蔭女子短期大学、その日本文化史料に職を得ました。二〇〇一（平成一三）年の改組で、学芸学部日本文化史学科へ異動したのですが、その専門科目に「文化財論」という科目がありました。この「文化財論」を担当することになり、樟蔭が持っている文化財―身近な文化財で授業を組み立てようと企てたことで、樟蔭が持っている大学（学園）資料と出会うことになった次第です。

その時最初に取り上げたのが、「樟徳館」です。この樟徳館、元々は創立者森平蔵の私邸で、現在、国の登録有形文化財となっております。今では手に入れることができないような、ひじょうに優れた銘木を使った和洋折衷の住宅建築で、昭和初期に建てられた名建築の一つとされています。テレビのロケに使われることもあって、最近で

すと、皆さんご覧になっておられるかどうか分かりませんが、NHKの朝の連続テレビ小説「カーネーション」でも、ロケに使われておりました。

樟徳館を「文化財論」で取り上げた際に、樟蔭にはいろいろな資料が残っていることを知り、今日最初にタイトルで使いました写真の建物―本学の記念館にあった資料と出会うことになりました。

資料と出会って、「文化財論」だけでなく他の科目でも何かと利用するようになりました。なんと言えばいいんでしょう、中世史をやっていると、扱うのはほとんど活字史料ですね、正直申しまして。現物の生の資料、しかも手つかずの資料に巡り会えるなんていうことはめったにありません。そういう幸運に恵まれる研究者というのは本当に少ないと思うんです。そんなこともあって、現物の、生の資料の魅力に、ある意味取り憑かれたような感じで、樟蔭の資料との関わりがスタートしました。そして、二〇〇三（平成一五）年からは学内の研究助成を得て、部分的に資料の整理とその分析に着手したという次第です。

一 大阪樟蔭女子大学における大学（学園）資料の現状と問題点

◇大学（学園）資料の整理・保存と活用への着手

今、お話させていただいたように、学内の研究助成を受けて、資料の整理と分析に着手した訳ですが、とりあえず、まず画像データを蓄積しようということを考えました。

最初はデジタルカメラを使って画像データを作っていたんですが、二〇〇八（平成二〇）年に、後でお話させていただく自校教育とのからみで、ブックスキャナーを導入することができました。以来、ブックスキャナーを利用

して、卒業アルバムですとか、草創期の各種文書ですとか、大学の前史ということで、特に女子専門学校の時期の資料に焦点を絞って、画像データの蓄積を現在に至るまで続けております。

蓄積したデータについては、授業での活用を考えました。文書は、一応、ペンで書かれているんですが、読み難いものがほとんどですので、それを学生と一緒に翻刻して分析するなど、授業の教材に使っております。その成果の一部は、活字にして報告することもできました。

そうこうしておりますと、画像をはじめとしていろいろとデータがかなりな程度集まっております。よくあるパターンだと思いますが、今度はそれを、誰でも広く使えるようにしようということで、データベース化の話がどことは無く出てまいります。実際、これまでに蓄積したデータの一部を、データベースとして試作を試みたこともあります。ただ、費用の問題、それから人材の問題が大きな壁となって、現在はデータベース化の話は中断をしております。

このように、私が関わってきた樟蔭の資料の整理や保存は、牛歩の如き進み具合です。卒業生に一人アルバイトに来てもらって、彼女にブックスキヤナーを使って画像データを蓄積してもらい、その画像データを翻刻するなり何なりしながら、あれこれ分析するということが今の活動の基本になっています。

◇歴史を物語る大学（学園）資料

こういう話ばかりだと何ですので、ちょっとだけ電気を消していただいてもいいですか。これからしばらく、樟蔭の資料にどんなものがあるのか、ご覧に入れようと思います。

今日は表紙の部分だけを用意してきましたんですが、「設立二閔スル書類」ですとか、高等女学校が開校した際に配られました『記念帖』ですとかいったものですね。こういった資料が残っております。

また、樟蔭高女が開校して間もない頃の絵葉書も残っております。残っているものだけではなくて、私が古書店で探し出した絵葉書などいっしょに画像データにしております。

一九一七年に樟蔭高等女学校が開校したと申しましたが、だいたい今見ていただいている四枚の絵葉書の写真のような雰囲気だったようです。写真1ですが、長瀬川という川がありまして、そこをかかえる橋を渡って校地の中へ入って行きます。中にコの字型の校舎、二階建ての木造の校舎がありました。

写真2は運動場の写真です。運動場には、この絵葉書の写真では、ちよつと判らないんですが、実は木レンガが敷かれております。土ぼこりを教室の中に入れない、水捌けを良くして、活動しやすい運動の条件を作ろうということで、運動場に木レンガを敷いていたようです。

それから写真3、これも絵葉書の写真ではちよつと判りにくいと思いますが、実はこれ、電気コンロです。プラグが見えます。いわゆる調理実習室なんですが、全て電気コンロです。「オール電化」という話が、原発事故の前ずいぶんと電力会社によって宣伝されていましたが、まさにそのようなことが、大正七（一九一八）年頃に樟蔭では行なわれておりました。

写真4の絵葉書、これは洗濯室、染物の染料を洗い流す洗濯室です。あと小さくて申し訳ないんですが、その左隣の写真を見ていただきたいと思いますでしょうか。後でこの校舎の今の写真もご覧入れようと思います。樟蔭高等女



写真1 正門から本館を望む



写真2 運動場



写真3 割烹室



写真4 洗濯室 (現「樟古館」)



写真5 『檀蔭学報』創刊号

学校開校当時の校舎が一つ残っているんですが、それがこの、今は「檀古館」と呼ばれている洗濯室です。

次の写真、「検定ニ関スル試験問題集」というのは、檀蔭女専も、御多聞に漏れず、中等教員の無試験検定の許可を得ておりました、毎年その申請をする際に文部省に試験問題を提出したようで、その控えが、昭和三（一九二八）年度から昭和二三（一九四八）年度のものまで残っております。

もう一枚写真5は、『檀蔭学報』と見えますが、昭和一一（一九三六）年から昭和一三（一九三八）年頃にかけて発行された学園広報誌です。写真5はその創刊号の表紙です。深緑色の袴を身につけた女専の生徒さんですね。抱えている本にはアルファベットらしきものが見えて洋書であることが判ります。それからセーラー服の方は高等

女学校の生徒さんです。こういったものも残されております。

さらに、申し訳ないことに画像の悪い方を取り込んでしまったんですが、高等女学校、女子専門学校、そして中・高・大・短大の卒業アルバムも残っております。

なるだけ一般受けの良いものからというところがあるんですが、こうした画像データを蓄積していつております。

静止画像の資料については、結構、どこの学校でもあるのではないかと思います。檀蔭には実

は、動画も残っております。今日は大正九（一九二〇）年、開校から二年ぐらいの時期のものを、ほんの少しさわりだけですが、見ていただくと思います。全部見ていただくと結構長いので、ちょっとだけ。

（動画再生中）

大阪の上本町、近鉄の上本町駅なんですけれども、そこから専用電車が走っております。それに乗る場面です。元は十六ミリのフィルムなんですけれども、かなり劣化しております。音は、元々の音が入っておりますので、今は消させていただいております。

間もなく、今もある東大阪の大阪キャンパスが映ります。現在は人家がいっぱい建っているんですが、当時は周りが田んぼだらけだった状況がよく判ります。右側に見えているのが校舎ですが、現在の近鉄奈良線を走っている電車の車窓から校舎を撮っているという形です。

最寄りの小阪駅です。駅から高女の生徒さんが学校へ向かっています。絵葉書で見ていただきました長瀬川、そこに架かる「橘橋」、正門の前の橋を渡って校地内に入るところです。次は朝会の様子です。

もう一つ、運動会の様子が判る映像もご覧に入れようと思います。昭和四（一九二九）年、第九回運動会の様子です。女専と高女の合同の運動会です。袴姿で入場してきたのが女専の生徒、白い体操服を着ているのが高女の生徒ということになります。

かなり大掛かりな運動会だったようで、第九回の映像には出てこないんですが、他の回の運動会の映像からは、フォークダンス、マスゲームのような演技の時には、楽団が生演奏をしているのが判ります。こうした運動会の映

像を授業で学生に見せると、斜めの線まで揃っているのに、結構驚きますね。単に縦横だけでなく斜めまで揃っていると行って。

画面に「オーバーゼア」とか出てきますが、こういったマスゲーム、フォークダンスがたくさん取り入れられていて、当時の体育教育の一端がうかがえます。映画なので、実際にどう動くかしているのかまで判って、興味深いです。

こうした大正末から昭和初期の動画を見ていただくだけの機会を作ってもいいぐらいなんです。これらの映像は、今は『樟の葉蔭に』という形で、昔、樟蔭の動画がNHKの「教養特集」という番組で取り上げられ、放送された時の映像の一卷を含めて、全部で十一巻に纏められております。こうした動画を紹介させていただくと、そこそ大阪の方にとっては、当時の雰囲気とか、街の様子が映っておりますので、非常に興味を持っていただけです。それから、「体育行脚」という題のついた動画もあります。その映像には、当時日本の植民地となっていた台湾、そして沖繩の昭和四（一九二九）年の様子が映っております。その中には、近年復元されましたが、第二次世界大戦で焼失した首里城の様子が映っている場面もございます。そんな具合で、樟蔭に残る動画は資料的な価値もずいぶんとあるのではないかと思います。

◇ 「さまざま」 大学（学園） 資料

こうした動画や画像を使って授業をしているんですが、ここまではちょっと良いところばかりをご覧に入れたような感じ。実際のところ、樟蔭の資料の現状は、本当にお恥ずかしい、「お寒い」状況です。

樟蔭の資料は、もともととは記念館―これも登録有形文化財になっている建物です―の部屋の一つを使った資料室

に保管されていました。ところが、教室が足らなくなったという学内事情で、地下の倉庫に急遽資料を移さなければならぬ事態が発生しました。さすがに地下の倉庫では、湿気などの問題もあるので、その後学園が建てたのがプレハブ二階建ての倉庫です。二階には、一応、物品棚があつて、そこに保存用の箱に資料を入れて積んで置いてありますが、階下は本当に物置になっています。

ところで、記念館の資料室から資料を移さなければならなくなった際、とりあえずどんな資料が残っているのか一覧できるように、仮目録といいますか、一覧を作りしました。

それで資料の概略は把握できたのですが、結局資料を元のように戻すだけのスペースは無く、箱詰めにして、なんとか積んであるという今の状況になってしまいました。そうやってきますと、「どこに何があるのかわからない」ということになりますので、なんとかそれを解決しなければならぬ。そこで一緒に整理をして下さっている同僚が思いついてくれたのが、レジュメにも例を載せさせていただいた、QRコードです。このQRコードを全部の箱に貼り付けてあります。

みなさん、もし携帯電話をお持ちでしたら、このQRコードをバーコードリーダーで読んでみて下さい。QRコードで確認すれば、箱の中に何が入っているのかが出るようにしてあります。ですから、携帯電話さえ持つて行けば、一覧が無くても、また箱をいちいち開けなくても、その箱に何が入っているのかだけは判ります。こういった形で、本当にとりあえずなんですけど、誰が倉庫に行つても資料が探せるようにはしたところです。ただやはり箱積み状態ですから、全てを把握できている人間はおられません。おそらく、画像データを作成してくれているアルバイトの卒業生が、一番資料の在処についてはよく解つているというのが実情だと思います。



QRコードの事例

そして年度が変わる頃になると、新しい資料が運び込まれてくるといったことが毎年起こります。それには一つには、改組が絡んでいたります。学科の変更があると学科の事務室が無くなったり、あるいは新しく作られたりします。そうすると、改組される学科の事務室にあったものを、とりあえずどこかで保管しなければならぬので、整理をする暇も無く、運び込まれてきたりすることがあります。また、退職される教員の研究室からも、図書館で受け入れてもらえない書籍以外のものが、捨てる訳にもいかぬということ、運び込まれてきたりします。こうして倉庫の中のもの、増えるばかりです。

その一方で、私が知らない倉庫が学内のいろいろな場所にあるらしく、そこに入れられていたものが、誰も知らない間に廃棄されてしまうことがあります。事務職員の方から「〇〇が捨てられてたんですが、ご存知でしたか」というようなことを後で聞いて、「えー」って言うようなことがこれまでに何度かありました。

◇ 〆大事なもの 〆は何か？

本当に、「立場が違えば、ただのゴミ」ということを実感します。結果的に、樟蔭にどれだけの資料があるのか、全容は不明と言わねばなりません。偉い人たちに言わせると、「大事なものだけ有ったらいいいじゃないですか」といことになります。「じゃあ、大事なものって何ですか？」っていう話に結局なるんです。偉い人たちとしては、学園草創期の資料ですか、卒業生で文化勲章を受けられた田辺聖子さんに関わる資料とかが、大事なものなんだろうというように見えます。学校にとっての 〆お宝 〆なら良いけれど、その他の資料については、なかなか価値を見出してもらえないというところでしょうか。

大学や学園にとって大事なものは何か、ということをおなりに考えてみますと、単純に 〆お宝 〆だけが大事なも

のではないだろうと思います。どの学校でも、大学や学園としての歩みがある訳ですが、それを刻印するもので、ですから極端なことを言えば、学校に残る全てのものということになるでしょう。ただ当然全てを残すことは出来な
いわけで、その中でどれだけのものを残すのかということをきちんと考えなければならぬと思います。

それから、やはり学校ですので、卒業生やあるいは在校生に対する責任があると考えます。当然、法令上残さなければならぬものがありますが、それ以外ですと、たとえば、そんなものって思われる方もあるかもしれませんが、卒業アルバムというのは、すごく大事だと思います。樟蔭でも「ホームカミングデー」と呼ばれる卒業生を招待する行事がありますが、その時、学園の広報の方が、卒業アルバムを使って展示をされていると、みなさん懐かしそうに見ていらっしやいます。年配の卒業生の方だと、戦災で卒業アルバム自体を無くされている方もいらっしやいます。それ以外にもいろいろな事情で卒業アルバムを失われた方がいらっしやったりします。そうした方たちが、手軽に自分の卒業アルバムを見ることができるような状況を、大学は作っておくべきではないかと思う訳です。あとはやはり、歴史学的な研究の対象に成り得るようなものも、当然残していかなければならないでしょう。

二 「樟蔭の窓」と大学（学園）資料

◇ 自校教育科目「樟蔭の窓」

こういった形で大学の資料に関わっておりましたら、それこそ大学の都合なんです。自校教育科目を開講するという話が出てまいりまして、それに関わることになったのが二〇〇七（平成一九）年です。

その自校教育科目の名称が「樟蔭の窓」です。その初年度の講義題目を表1として載せさせていただきます。

す。記念館や樟徳館、あるいは図書館の中にできた田
 ちなみに七〜九回目は、小阪キャンパスの見学会で
 含めて十一名が、十五回の授業を担当しました。

育センターという部署に運営は移管され、私は授業担当
 者としてのみ関わるだけになりました。

表1 2007年度「樟蔭の窓」講義題目

※半期1単位（8回）／担当者5名 1) 本学の女子教育史上の特性について 2) 巨大商都大坂の建設とその意味 3) 江戸時代の大坂の文化とその史跡 4) “樟蔭ブランド”の確立 5) 昭和戦前期の樟蔭学園 6) ヘアスタイルと化粧と女性の生き方 7) 美しい樟蔭の私達Ⅰ - 袴と制服 8) 美しい樟蔭の私達Ⅱ - モダンガールの昨日・今日・明日

当初は、半期一単位の講義科目ということで、五人の教員、八回の授業でスタートしました。私が担当したのは、四回目と五回目です。また大学に自校教育科目のような特徴的な科目の運営を担う組織ができたのですが、そのメンバーに任命されて、「樟蔭の窓」の運営にも携わることになりました。そういった中で、先のブックス
 キャンパーを幸運にも
 購入することができ
 ました。三年間運営
 に関わっていました
 が、その後、教養教

表2 2011年度「樟蔭の窓」講義題目

※春期2単位（15回）／コーディネーター+担当者10名 +在学生・卒業生 1) オリエンテーション、「樟蔭の窓」とは 2) 原点-森平蔵の目指したもの、および初代校長伊賀駒吉郎の女子教育論 3) 近代女子教育史上における樟蔭の位置 4) 樟蔭のこころ-校歌・校章をめぐる 5) “樟蔭ブランド”の確立 6) 大正～昭和初期の樟蔭と学生生活・15年戦争と樟蔭 7～9) [小阪キャンパスの見学] あこがれの袴とセーラー服、登録有形文化財-樟徳館-、卒業生田辺聖子との出会い、田辺聖子文学館見学 10) 在学生が語る「私たちの樟蔭、私たちのキャンパス」 11) 戦後の樟蔭 12) 関屋キャンパスの歩み 13・14) [関屋キャンパス見学] フォッションから見た戦後の樟蔭、卒業生との対話 15) 総括
--

辺聖子文学館、そういった施設を見学する機会を設けるなどしています。それから、学内で活躍をしている在学生たちに来てもらって、彼女たちの活動を一年生―受講生の中心は一年生になりますので―に対して発表してもらったのが十回目です。十三・十四回目は、樟蔭には二つキャンパスがございますので、もう一つの閑屋キャンパスの見学会です。その際には、これは二年目から恒例化しているのですが、社会に出て活躍する卒業生を招いて、いろいろな話をしてもらう場も設けております。

こういった形で、「樟蔭の窓」という自校教育科目が展開しております。

◇教科書の作成へ

半期一単位八回の授業でスタートした科目が、十五回の、なんて言うんですか、授業としてそれなりに纏まりかけた段階で、「教科書を作れ」という話が舞い降りてきました。その「責任者になりなさい」と、私に教科書編集の指示が出たのが昨年の五月です。その際課せられたのは、「次の年度の授業に間に合わせなさい」、ですから、今年度の授業に間に合うように作成するということでした。

六月には教授会で教科書の作成が正式に認められました。ただ当然私一人で出来るような仕事ではないので、「樟蔭の窓」を運営する教養教育センターのセンター長、学園の資料を使わないわけにはいきませんから、学園の職員でそういったことに積極的に関わってくださる方、また幸いなことに授業担当者でもある近代女子教育の専門家が、田辺聖子文学館に学芸員として勤務してくださっていますので、その方にも加わっていただいて、四名からなる編集委員会を組織しました。

ちょうど去年の今頃は、執筆を依頼した方々からの原稿がほぼ出揃らい、いろいろと手直しをお願いしていた時

期です。今年になって、東北の大震災の起こった三月十一日、大阪でもずいぶんと揺れましたが、ちょうど地震の起こった時には、校舎の七階にある私の研究室で最終段階の詰めの作業をしておりましたことを覚えております。そんなこんなで、なんとか三月の末には「樟蔭の窓」の教科書を完成することができました。ブックレット型一五〇頁余り、全十五講からなる教科書です。

本来なら、この教科書に基づいて、今年度の授業は展開されるべきだったのですが、おそらくみなさんにも御推測いただけたと思います。今年度のシラバスを作成する時期には、教科書がどのようなものに仕上がるかまだまだ不確定のところがありました。そのため、今年度の受講生にも教科書は購入してもらいましたが、実際にこの教科書が本格的に使われるのは、来年度からということになります。

このように、「樟蔭の窓」のスタートから教科書を作るところまで、私は関わってきましたが、教科書を作成するに当たって、編集委員になっていただいた方たちと「樟蔭の窓」で何をやろうか、いったい何をしないといけないのか、ということを議論せざるを得ませんでした。もちろん、期限に間に合わせて作るのが最優先の課題でしたから、そんなに深く議論を交わした訳ではありません。けれども編集委員会の中では、「どうしましょうね」という言葉を繰り返しながら教科書を作ったと感じております。ほんやりとしたものですが、結局、「樟蔭の窓」が樟蔭生としてのアイデンティティー形成にどういう形で寄与できるのか、ということを考えながら、章立てや内容を考えたように思います。

繰り返しになりますが、樟蔭のシンボルとなっているのは深緑色の袴です。教科書にも学生にモデルになってもらって、袴姿の写真を掲載しました。そのうち一人は、今の樟蔭で卒業式などで袴を身につけるときのイメージです。あとの二人は、大正の末から昭和の初期、それこそ樟蔭女専ができた頃の正装、および通学姿のイメージで登

場してもらいました。たとえばこうした、樟蔭生のイメージがどのようなものか、どのようなものだったのか、ということについて受講生に考えてもらい、間接的ではあるけれども、「樟蔭に来て良かった」「樟蔭でやっぱりいいよね」というふうに最終的には思ってもらえたら、という願いのようなものを込めて教科書を作ったと言えるかもしれません。

◇自校史教育か、自校教育か

ある意味当たり前のことかもしれませんが、自校の歴史を語ったからといって、それだけでは自校教育にはならないのではないのでしょうか。ただ、自校史教育が、自校教育のひじょうに大きな部分を占めていることは間違いないと考えます。

樟蔭の例でお話すると、事実に基づいて「樟蔭っていうのはこんな学校なんですよ」ということを在校生に伝えるためには、自校史を積み重ねていくことが必須のものでしょう。そして、事実に基づいて自校史を語るということは、在校生のみならず、卒業生、あるいはこれから入学してきれる将来の在学生のためにも必要だと思います。

「学校の怪談」ではありませんが、口伝えにいろいろな噂、学校に関わる噂が広まったりします。噂であったり、あるいは間違った情報が、あたかもその学校の「正しい」歴史として語られることがあります。

たとえば樟蔭でも、冷静に考えればそんなことは無理だとわかるはずなんです。が、「戦時中も樟蔭は軍国主義ではなかった」というようなことが言われます。実際に資料を見ると、樟蔭というのは、お国の言うことを、結構、忠実にやる学校で、軍国主義的なことも、それなりにいろいろとやっていたことがすぐに判ります。

卒業生や教職員だった方たち、そういう関係者の中で樟蔭のことを良く思っただけで下さっている方ほど、学校の歴史を極度に美化して語るようなところが、正直言っているところと感ずきます。その一方で、不都合なところには目を閉ざすことが多く、そうした「歪み」を、どうやって修正していくか。今の学校がどのような道を歩んできたのか、ということを確認に考えようとしたら、その「歪み」を訂正しない訳にはいきません。そのためにはやはり、学校に残る資料に基づいて、「本当はこうだったんだ」という事実を明らかにしていくしかありません。

それから、卒業生の方たちからすると、自分たちの学んだ時代が「標準」なんですね。ですから、どの年代でもそうなのですが、自分たちのやっていたことがスタンダード、「正しいんだ」という意識を感じることがあります。でも実際のところ、当然、変化しているわけですから。樟蔭生の袴の着方で言いますと、結んで垂れた腰紐の先端に校章を付けたというものが、今は普通なのですが、でもそれは、いつ頃からかはつきりはしませんが、変化してきた結果そうなったんですね。実際、前に見ていた『樟蔭學報』創刊号表紙の袴姿の生徒の絵でも判るんですが、腰のところに校章を付けて描かれていますし、最初の頃の卒業アルバムの写真を見ても、やはり腰のところに校章が付いているのを確認できます。でもある時期以降の卒業生からすれば、やっぱり腰紐の先端に校章を付けるのが「正しい」姿だということになるわけです。校章の位置は些細なことかもしれませんが、こういった「歪み」とか誤解を、なるだけ正確な情報によって修正していくために、学校、大学の資料というのを使わないといけないと考えます。

むすびにかえて

与えられた時間をオーバーしかりましたので、最後に改めて、大学、あるいは学園資料が、どういったものなのかという点に触れさせていただいて、終わりにさせていただこうと思います。

まず、大学（学園）資料というのは、歴史資料として、それは単純に個別の学校の歴史を物語るだけでなく、一般的な価値を有する資料として存在していると考えます。たとえば近現代の教育史、樟蔭の場合であれば特に、近代女子教育の歩みを物語る資料たり得るものであると確信しています。

樟蔭の資料に関しては、正直なところ近年では、ほとんど田辺聖子さんしか注目されることはありませんでした。ところが今年になって、近代体育史、ダンス教育の研究者の方から問い合わせがあり、それに対して資料を提供させていただいたりしています。学外の方から注目されることで、自校だけの価値にとどまらない一般的な価値を見出される経験をして、改めて個別の学校に残っている資料の歴史資料としての重要性に目を開かされた思いです。

次に、大学（学園）資料は、言うまでも無く、自校教育の基礎になるものです。自校教育の中で、おそらくどの大学でも強調される項目の一つが「伝統」ではないかと思えます。ただ「大学の伝統」と言った場合、無形の雰囲気やイメージで語られることが多いように感じのですが、そうした雰囲気やイメージについて、有形の大学資料で裏付けることができるかすれば、大学資料というのは、まさに「伝統」を支える物的基盤そのものと言うことができるのではないのでしょうか。これは大学の構成員全てに共有してもらいたい点です。

最後に、大学（学園）資料は、その活用の仕方次第で多様な可能性を有するものであると考えます。大学の広報、宣伝に活用することができるということはすぐに納得していただけるかと思えます。加えて、自校教育をはじめと

して、学芸員やアーキビストの養成のための教育など、さまざまな教育活動の素材として使うことができるということも御理解いただけるのではないのでしょうか。そしてこれは付け足しになりますが、自校教育の教科書は教職員研修用のテキストとして、大学のFD活動にも利用可能です。

活用ということで、もう一つだけお話しさせていただきたいのは、大学の資料は、もちろん学内の資料ではあるんですが、学外と繋がるための回路にもなり得るという点です。今日御紹介させていただいたような画像などを使って、私も学外の公開講座などで何回かお話させていただいたことがございます。ただそういった講座モノ以外にも、実は東大阪市内のNPO法人の方とコラボレーションをして、樟蔭の資料も利用しながら大学で学園祭にあわせてイベントを開いたことがございます。その経験から、大学資料はその大学のものであるんですが、やりようによっては地域と繋がる強力なツールにもなり得るのではないかとの思いを強くしております。

本当に夢のような話なんですけど、いつかは大学資料館と大学のアーカイブスを兼ねたような、そういう施設が樟蔭にもできたらいいなあ、と思っておりますが、これは、多分、夢で終わるんだろうなあ、と思います・・・。

大学（学園）資料が、学園・大学にとつての貴重な資源であり、活用の仕方次第で多様な可能性を秘めたものであることを再確認させていただいて、お話を終わらせていただきます。

どうも、ご清聴ありがとうございました。